① 生徒主事

関東大震災以降、諸学校において学生の左翼活動が盛んになって来たなかで、文部省は昭和三年に思想取締り対策の一環として学生課を開設し、また、同省直轄学校に専任の学生（生徒）主事、主事補を置いて学徒の行動の監督、訓育の任にあたらせることとした。その結果、本校では翌四年一月二十一日に鈴川信一が「右者大正五年以来本校嘱託講師トシテ体操授業並ニ用器画法授業及教務掛主任等ヲ担当シ勤続ヲ以テ今日ニ至リ十余年間熱心生徒の薫育指導ニ尽力シ尤モ校内ニ於ケル諸般事情ニ通暁セルモノニ有之本校生徒主事トシテ最適任者ト認メラレ候」（昭和三年十月「生徒主事任命上申案」）という理由により生徒主事に任命された。

鈴川は明治二十七年七月本校絵画科を卒業、同二十九年以降兵庫県豊岡尋常中学校助教諭、同三十一年奈良県（郡山）尋常中学校教諭、同三十二年同校舎監、同三十三年京都府第二中学校教諭、同三十五年同校舎監、大正五年同校退職後本校の体操授業嘱託・教務掛主任兼庶務掛となり、同九年より用器画法授業も担当、同十一年以降毎年教員検定委員を勤めた。その間、明治二十七年一年志願兵として第一師団歩兵第十五聯隊補充大隊へ入隊して以来兵役に従事し、日清、日露の両戦争に従軍、同三十八年陸軍歩兵大尉となり同四十五年退役している。大正五年以降は本校構内官舎に住んだ。

鈴川は卒業生であり、本校の事情、気風に通じていたためか、生徒主事という厳めしい職務にも拘らず生徒たちには親しまれた様子である。尤もそれは当局の左翼弾圧が強まる前だったことにもよる。昭和七年三月、彼が生徒主事として『美術新論』の記者に語った次の言葉にもまだのんびりしたものが感じられる。

「師範科の他科に比して最も多くの志望者を見ると云ふのは現時の社會需要の上から見て當然の事であり、金工、鑄造、漆工等の志望者が少ないのはこれ等の諸科が未だ社會的に深く理解されてゐない事に原因してゐるのでせう。併し西洋畫、日本畫、彫刻等の志望者が年々増加する傾向のある事は考へなければならない問題と思ひます」

「從來我美術學校としては他の學校に比して卒業後の生活問題には至つて無關心だつたのです、尤も師範科は別問題ですが、併し時代は在來の主義を奉じ續ける譯には行かなくなりました、たゞ産み放つし（ママ）では不可ない、何とか生活に對しての方法を講じなければと云ふ問題が學校當局にカナリ強く動いてきたのです」

「元來本校は師範科を除いた他の科、殊に日本畫、西洋畫、彫刻等は全く天才教育を主眼とされたもので、從つて今日までの實例によつても百人の中の一割が或はそれに滿たない人達だけが僅かに現畫壇に認められるといふ有様です。尤も天才がそんなにどし〳〵濫造されてはたまりませんがねアハ……」

「それに入學試驗にしても、普通に中學校在學中に習つた位の腕で、スグに入學する事は中々困難なので、志望者は在學中或は卒業後に特別に研究所或は先輩によつてデッサンの練習を積む様な事になる、それでも一回ですぐにパスすると云ふのは稀れで三回四回と失敗を重ねる人もあります、それで何年目かに入學出來たとして五年間の在學修業を殆んど十年計畫と云ふ事になるので

す。そしてこの十年後の修業卒業者の中から、畫壇にその存在を認め得られる者は、今までの結果としては僅かに一割内外に過ぎない、而かもその認められるまでには、卒業後からの眞の研究と克苦練磨の難行を經てからの事ですから、全く大變な事なのです、だから私は畫家志望者の入學を決して勸めたくありません、寧ろ留めたいのです」

「昔は身體の弱いもの或は不具の人達に仕方がないから繪でもかゝせると云つた甚だ單純な考で美校へ入られた樣な事實がありました、併し今ではそんな馬鹿げた下らん事を考へる人もなくなりましたが、人一倍の勤勉と克苦努力を要するので、體力的にもその忍苦に耐え得る健康を有する事と、頭腦の明晰である事は勿論、學資の續く事の三つの條件が備へられてゐない限り美校入學は無意識[味]となります、況んや美校在學は單なる基礎の修業で、實際の研究と仕事は卒業後にあるのですから、まことに前途遼遠と云はねばなりません」

「どこの學生でも同じですが、特に本校生徒は勤勉でなければなりません、而かも教育方針が天才教育であるので、殆んど自由研究の制度になつております、生徒自身がその氣にならない限り決してその實は擧りつこはないのです、嘗て正木校長が、『吾が美校は譬喩へて云へば釣鐘である、これをたゝけば鳴る、たゝかなければ何時まで待つてもひとりでは鳴らない、そして怠け者を無理に引張つてたゝかせ樣とはしないのだから覺悟は生徒自身にある』と誠[誠]められた事があります、これは一面本校の設備と教師の完備をも物語つてゐる事にもなるのです」

「在學中に於ける成績が必ずしも卒業後のその人の手腕才能を裏書きするものにはならないのです、今までの經過から見ても特待生、優等卒業生の悉くが、畫壇の地位を確保してゐるとは云へません、尤も之等の人々には内に才能を蓄へてゐて時機が來ればキツト出す人達だと信じてはゐますがネ」

「或る人が統計をとつて見たら、卒業成績の六七番と云ふ邊りが社會的に最も頭角を現はして活躍してゐるとの事です。併しそれが美校に當てはまるかどうかは知りません」

「美校生の氣風ですか、一口に云へばズボラです、これは極端な個性發輝の養成の結果とも云へる事です。時代時代によつて多少の相違はありますが大體に於いて集團、統一或は協力と云つた樣な傾向がありません、どこまでも個人個人としての自由行動が尊ばれます、その代り他の學生に見られない美しいものがあります、それは純眞です、表裏がなく、陰險でなく、淡白で明つ放しです、これが特色として最も誇り得られると思ひます」

「危險思想的な傾向は全然ないとは云へませんが極く少數です、何分にも仕事そのものが法律、經濟などと違つて對照[象カ]を自然に求める結果から直接社會的に進み得ない狀態にあるのだと思ふのです。尤も藝術運動を通してその方面に興味を感じて行く事は有り得る事で頭腦の明晰な者なら當然考へられる事でせう」

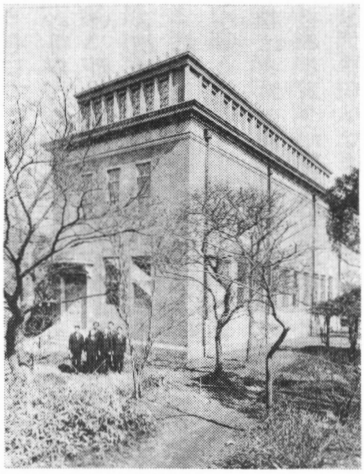
（「画学校と研究所・東京美術学校の巻」『美術新論』第七巻第三号。昭和七年三月）

しかし、鈴川は昭和七年三月に退官し、佐々木卓が後任となる。

佐々木は大正三年東京帝国大学文科大学史学科卒業。同八年文部属、帝国美術院書記、同十二年福岡高等学校教授、昭和六年名古屋医科大学学生主事、同事務官等を勤めた人で、同七年三月三十日に本校生徒主事となるまでは、本校とは殆んど関係が無かった。彼は同年七月教授を兼任し、同十六年生徒課長となり、同十九年東京高等師範学校教授へ転任する。彼が本校生徒主事となった頃から校内の左翼活動は容赦なく弾圧されるようになった（609頁参照）。ただし、それは時の文教政策の結果でもあろう。

② 陳列館

昭和四年五月十五日、陳列館（本校所蔵参考品陳列館。岡田信一郎設計）が完成した。本書所載「東京美術学校年報」に明らかなように、本校は多年に亙って陳列館建設の要請を行なって来たが、それが漸く実現したわけである。諸新聞の報道によれば、建設が決定したのは前年六月の頃で、『東京美術学校校友会月報』第二十七巻第二号もこれを次のように報じた。



陳列館

本校所藏參考品陳列館建設

多年といふやうな言葉では表せない程前から我々教職員生徒一般が熱望して居た處の、本校所藏品陳列館の建設費が些少では有るが文部省から與へられたと聞いた。聞いた時に並居るものは一聲に「それはいゝ」と心から此の報告を喜んだ。

此の陳列館建設費は數年前から毎年豫算を計上して來たやうだし、此の一、二年は、その豫算を幾等分かして毎年增建の計畫をしたりして居たが、それでも通らなかつた。此度は文部省で昨年の建築費の殘餘が有つたのを本校の此の企に廻されたとかで金四萬圓で百二三十坪の物を建てる計畫のやうに聞いた。結構な事だ。

百三十坪と云ふと今の建築科の建物の下（一階）だけ位なものだそうで、陳列館としては無論尙四五倍はほしい、でも無いと云ふ事よりはどれだけいゝかわからない、今迄は參考品と稱しながら、ほとんど我々の眼に觸れないでお庫の中に埋まつて居るやうな形だつたから、成る可く一般に便利な陳列館が一日も早く建つて立派な參考品が朝夕我々の眼に觸れるやうになつてほしい、その曉には工藝などももつと落付いた作品を新しい人の中から出す事が出來やうと思ふ。

また、正木直彦は『十三松堂日記』に次のように記している。